

合宿方式のドライビングスクールから 見えてきた若者たちの素晴らしさ

Mランド益田校

(本社) 島根県益田市安富町3330-1
従業員数 120人

広島から益田までバスで3時間。交通の便は決して恵まれているとは言えないが、Mランド益田校（益田ドライビングスクール）には全国から若者たちが集まってくる。四輪部門では全国で最も卒業生の多い自動車教習所だという。ここには宿泊施設、飲食施設、コンビニ、テニスコート、ゴルフ練習場、さらには美術ギャラリーまであり、約2週間の合宿生活で運転免許を取るだけでなく、さまざまなことを体験できる。生涯忘れられない貴重な体験をしたという卒業生が少なくない。このことが評判を呼び、自動車教習所業界で最初の「ハイサービス日本300選」に選ばれている。

■免許を取るための合宿生活

自動車教習所はサービス業であり、運転を習いに来る人たちはお客様である。その考え方から、生徒は「ゲスト」、先生は「インストラクター」と呼ばれている。

教えたとおりでできないからといって邪険に振る舞うインストラクターはここにはいない。ゲスト一人ひとりの理解力や身体能力に合わせて、やさしく、わかりやすく教えてもらえる。普通車ATの場合なら、誰でも2週間で合格までもっていけるはずであり、合格できないのは教える側に問題があるとして、不合格で滞在期間が延びても、追加の教習費や滞在費が請求されるこ

とはない。

「自動車の運転というのは、難しいことでも何でもなく、教えれば誰でもできることです」と創業者の小河^{こがわじろう}二郎会長は言う。「歩いたり、走ったり、自転車に乗ったりするのと同じくらい基本的なことです。本



小河二郎会長



Mランドの全景（無心山から）

来なら、親や兄弟、あるいは先輩や友人に教えてもらえばそれで済む。にもかかわらず、教える場所が自動車教習所に限定され、交通法規の細部にわたった学科試験が課されているのは、この国の官僚主義が関係しています。だから、2週間もここに滞在してもらって、ただ自動車の運転を教わるだけというのはあまりにもったいない。できるだけいろんなことを体験してほしいと思ったのです」

今年87歳の小河さんの言葉は、はっとするほど新鮮で奥が深い。

日本海に注ぐ高津川を眼下に見渡せる丘陵の22万平米に及ぶ敷地には、合宿生活を退屈させないだけのさまざまな施設が整っている。ゲストのための宿泊施設は500人分にのぼる。シングルルームやツインルームもあるが、多くは4人部屋あるいは5人部屋。できるだけこれら大部屋を利用するようにと、Mランドでは勧めている。知らない人と一緒に共同生活するなかでこそ得るものが大きいからだ。

■ 運転だけでなく心も磨く

決められた教習プログラムに沿って運転を学ぶほかは、どのように過ごそうと自由だが、一つだけルールがある。お互いに必ず挨拶しましょうというもの。それが徹底されていて、みんなが「こんにちは」「よろしくお願ひします」「ありがとうございます」と挨拶するから、新しい入校者もすぐにそれを真似て、大きな声で挨拶するようになる。そして、挨拶し合ううちに、はじめて会ったゲスト同士がすぐに仲良くなれるのだ。



「挨拶」はMランドのルール

もう一つの重要な仕掛けは、「Mマネー」というここだけの通貨で、Mランド内の買い物はこれですることになっている。教習費、宿泊費、食費は、あらかじめ払い込んだ料金（ちなみに、普通車ATの場合の通常料金は26万5000円）に含まれているから「Mマネー」がなくても生活できるのだが、売店、喫茶店、ゴルフ練習場、エステサロン、カラオケルーム、温泉岩盤浴などを利用するには「Mマネー」が必要になる。

「Mマネー」は現金で買えるほか、校内清掃、トイレ清掃などのボランティア活動に参加したり、他のゲストや職員に対する感謝の気持ちをサンキューレターに書けば「Mマネー」を稼ぐことができる。あるいは、「無尽蔵」という茶室があって、週1回そこで茶会が開かれ、お茶の作法を教えてもらえるが、これに参加するだけでも「Mマネー」がもらえる。

ゲストの多くはこれらの活動に積極的に参加して、ここでの充実した生活を送る。いわば「Mマネー」を契機にして、奉仕の

心、感謝の心の実践を促し、それによって人間教育も行われているのだ。

「教育と思ってやっているわけではありません。ただ、せっかくここまで来ていただいたのだから、できるだけものを持って帰ってもらいたいのです」と小河さんは言う。その「できるだけのもの」というのが、単なる遊びや一時的な享楽ではなく、人間としての奥深い部分で何かを体験し、何かを感じていってほしいと言うのだ。

本部事務所の近くに、幼い少女が一輪の椿の花を差し出しているブロンズ像がある。「一無の像^{やわらぎ}=變の像」という。「一無」とは「一生無事故」の意味。故草柳大蔵氏が、世の中から交通事故をなくそうとの願いを込めて各地に設置を呼びかけた何体かの彫像の一つで、この幼い命を守るやさしさ、温かさを、ハンドルを握る一人ひとりがしっかり身につけようと訴えている。そのやさしさ、温かさを「變^{やわらぎ}の心」と呼び、Mランドはそれをゲストとスタッフの共通理念としている。

Mランドの全体が見渡せる無心山という山の頂に「變^{やわらぎ}の塔」と呼ばれるモニュメントがある。そして、小河さんは、著書『全国から人が集まる不思議な自動車教習所』（PHP研究所刊）の中で「變^{やわらぎ}の心」について、次のように書いている。

「たとえば、溺れている子供を見れば、わが身を省みず助けようとしたり、親が一生懸命働く姿を見れば、親孝行しようと考え



清掃奉仕で「Mマネー」を稼ぐ



燮（やわらぎ）の塔

たりします。誰かに強制されずとも、自然にそういう気持ちになるわけで、人間は本来、そんな素晴らしい心を持っています。この心を私も持ちたいし、社員にも持ってほしい。さらにはゲストにも持っていただきたい。それが私の理想の経営です」

■ Mランド誕生のいきさつ

小河さんは、益田市にある石見交通というバス会社の創業者の二男として生まれました。同社の益田営業所長や、関連の東京のタクシー会社の社長を務めたが、父が労働争議に嫌気がさして会社を売却すると言い出したことに反対し、農協からの融資で同社の株を買い占めようとした。このことが父の逆鱗に触れ、勘当を言い渡された。小河さんは集めた株を父に売却、手元に残った資金で益田ドライビングスクールを創業したのである。1963年のことである。

モータリゼーションが急速にすすんでいった時代で、車の免許を取りたいという人はこの地域にも多く、当初の10年間は順風満帆だった。しかし、それが一巡してしまう

と、顧客は新たに免許取得可能年齢に達した人だけになった。そんな中で益田市周辺地域だけを相手にしては、経営は成り立たない。とって、益田市は、人口密集地域からあまりにも遠すぎた。

「益田で商売するのは無理だ。せめて松江くらいの人口規模がないと…と言われました。しかし、私にはこの町を見捨てることはできなかった。みんながそう言って益田を見限ってしまえば、この町はどこまでも過疎化の深みにはまり込んでいくしかありません」と小河さんは言う。

そこで考えに考え抜いた末に、合宿方式のドライビングスクールという斬新なアイデアにたどりついた。「それが当たったのですね」との記者の言葉を、小河さんは笑いながら「そんな簡単なものじゃありません」と遮った。「挨拶」というルールも、「Mマネー」というゲストたちを参加させる仕掛けも、「燮^{やわらぎ}の心」という共通理念も、小河さんの人生のさまざまな出会いの中でひらめき、何年も何十年も時間をかけて熟成していまの形にたどりついたものらしい。

たとえば、「挨拶」の大切さに気づかされたのは、40年以上前、小河さんが東京のタクシー会社の社長だったころのことだ。当時はホテル住まいで、そこから会社へ出勤していた。朝、エレベーターでフロントまで降りる途中、何人もの外国人が乗り込んでくる。彼らは気軽に「グッドモーニング」と挨拶するが、そう声をかけられた日

本人は、「グッドモーニング」と返すことができず、あらぬ方向を向いてもじもじしていた。それを見て恥ずかしくてならなかったと小河さんは言う。

挨拶は人間関係の出発点である。それがうまくできないと、その後の人間関係が築けない。そこから世界が広がっていかない。その思いがずっとあって、合宿方式のドライビングスクールをはじめてしばらくたってから、ゲストとスタッフの人間関係をつくる第一歩として挨拶のルールをつくった。そのために、ケンタッキー州生まれのアメリカ人青年を雇い入れ、みんなに挨拶を教えることから始めたという。

■若い人たちは十分に素晴らしい

ドライビングスクールというのは、免許を取ってしまえばそれ以上用はなく、リピートがきかない。だから、目の前の客から代金を受け取ってしまうと、あとはおざなりに契約上の義務を果たすだけになりやすいのだが、Mランドの場合は卒業生たちのクチコミが頼りである。彼らが「あそこはいいよ。ぜひ行ってみたら」と兄弟や後輩や友人、知人に勧めてくれない限り、次のお客様につながらない。北海道や沖縄、東京や大阪から、飛行機や新幹線とバスを乗り継いで益田まで行ってみようと思わせるにはどうすればよいか。

小河さんが見つけた答えは、卒業生たちのその後の人生の中で、必ず思い出し



Mランドを案内してくれた総務部長・椋木勇一さん。「ゲスト同士が仲良くなり、さまざまな体験をして、見違えるほど明るく変わっていくのを見ると、こっちも涙が出そうになるくらい感動します」

てもらえるような、心の奥底にいつまでも残る見聞や体験を持って帰ってもらおうということだった。小河さんは毎日Mランドの会長室に詰め、午後にはMランド内を歩き回り、そのことをずっと考え続けている。

最近立てられた看板に「3つの宝」というのがある。次のような内容だ。

1. 乗り物に乗ったとき立っていることを原則にしましょう。座るのはご婦人や子供です。世間の人が見ています。この人は国の宝です。
2. 公共の場に駐車するとき出入口に遠い所へ駐車しましょう。この人こそ地域社会の宝です。
3. 家族での挨拶の順番。先ず父親から先に挨拶しましょう。皆さんおはようございます。お父さんおはようございます。これで父親は変わります。あなたの家族は変わります。あなたは家の宝です。

ゲストの中には髪を金色に染めたり、ピアスを付けた若者もいる。彼らも含めて、

入校者の多くが笑顔で挨拶し、すすんで掃除したり、整理整頓したりして人の役に立つことの喜びに目覚める。年1回の「Mランドまつり」には、ここで過ごした日々が忘れられないと、全国から卒業生が集まり、地元の人たちを含めて数千人が集う。彼らを見ている小河さんは、いまの若者たちを頼もしく、誇らしく感じるという。

「テレビや新聞を見ると、いまの若い人を取り巻く環境の悪さが強調されていますね。そして、若い人自身もどんどん悪くなっているように言われる。しかし、ここで毎日若い人と接していると、私には若い人たちの素晴らしさがよくわかります。彼らはやわらかな感受性と十分な力強さを持っていますよ。世の中というのはいろんな人



「Mランドまつり」での小河会長と卒業生たち

の思いでつくられる。これから長く生きる若い人はそれだけ思いが強いはずで、彼らを見ていると、世の中はどんどん良くなっていくように思えます。そのことをはっきり口に出して表現して、若い人たちを後押ししてあげることが、年長者の役目だと思います」

取材・執筆 山口 幸正 (やまぐち ゆきまさ)

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。30年以上にわたって企業の改善活動を取材してきた経験と実績を活かし、現在はフリーライターとして幅広く活躍。

●創意社ホームページ <http://www.eonet.ne.jp/~souisha/> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中